

令和三年（2022）を振り返って

菅井松雲

早 1 年が過ぎようとしている。今年は例年にくらべ歳月が特に早く進んでいるように感じた。正月の大雪から始まり巷はコロナに振り回され、生活様式も様変わりしたようだ。その影響でここ 2 年余りは会員の皆さんと楽しく過ごす機会がなく、コミュニケーション不足になってはいないだろうかと心配になる事が多い。新年会、墨雲展の親睦会も大事な行事の 1 つだったことを改めて実感する。大人の習い事は、単に技術の修得だけではないということだ。何よりも人と人の絆、つながりが大切で、そこから何か生まれるのも確かにあるのだということ、しかしながらコロナ禍で色々と制約がある中、書花展、墨雲展、錬成会をほぼ例年通り開催できた事は会員の協力、理解、努力の賜と思う。

夏には東京オリンピックが開催され、無観客で選手達は物足らなかつたであろうが、日本中がテレビで応援し、唯一明るい話題であった。史上最高のメダル獲得数は、いかに選手達がこの一瞬の為に精進、努力してきたかの証しであって、我々書道人も見習わなければならない所だと、自分自身を戒めた。会員もその思いを感じてくれたのか春からの公募展では、各展覧会共 最高賞をはじめ素晴らしい結果を残してくれた。スポーツで例えるなら小生がコーチ、会員が選手といったところだが その練習の成果が見事に表われた一年だった。その一方で増々 外からは「松雲社中」包囲網、要注意、打倒と言った感じが受け取られるのも確かで、それを打ち破るだけの力、作品力をこれから目指していかなければ潰されてしまう危機感もある。しかし、私は春浦調を継承しつつ、何か新しい感覚を模索しようと思っている。簡単でないのはわかっているが……………。

さて、2022 年は「寅」年、「伸びる」「広める」の意味があるらしく、草木が土中で芽を出そうとしている様を表す。堂々とか勇猛のイメージもあるが、会としては やはり例外にもれず高齢化や小子化、芸術離れ等 マイナス要素が多く先行きは決して明るくない。会員の減少、用品の値上りも頭が痛い。何とか良い方向に行く方法はないものかと思案するが役員各位、会員の「力」をぜひ貸して頂き 少しでも明るい状況になる事を希望している。明石幸子先生が亡くなり、これからの本部運営は今のところ未定だが当会はブレることなく一丸となって前へ進んでいってほしいと願うばかりである。